

# 樹 と 釈 尊

——東洋的自然觀の考察——

高 橋 堯 昭



最近「帝釈窟說法」像、(写真1)即ち帝釈天が洞窟中説法の釈尊を楽師をつれて慰問するという大きなガンダーラ彫刻を入手した。こうした彫刻は各地の博物館に十体程紹介されてはいるが、この彫刻は特殊なもので釈尊の肩から火が出、法衣の裾から水が流れ出ている、所謂「双神變」の像で非常に珍しい。後述の如く、釈尊を人間の立場を越えて「超越者」「救済者」として考えた、仏陀觀の轉換を示す像といえる。

然して、私がこの小論で問題としたいのは、仏陀のまわりの「山林」を表わす部分に、樹(大分こわれてはいるが)の中に人物・虎・象・鹿・猿そして鳥等が彫られていることである。所謂「自然にかこまれた釈尊」という点である。これは樹の下から樹の下に、そして自然の洞窟の中に止住され遊行された釈尊の「自然と一枚となった生涯」を示すと共に、釈尊を樹や洞窟で表現される「自然の生命力」の凝固發現として考えるようになったことを示している。且つ又私は「樹にかこまれた洞窟中の釈尊」像に東洋的な自然觀を見る。そしてこれこそ現代の人類の破滅の危機を救うものであると思うからである。

樹と釈尊(高橋)



1 帝釈窟説法 Swat 出土 筆者蔵

即ち、長い間の間違った自然観、西洋流に自然と人間を分ち、不道にも自然に対する人間の優位を信じ、勝手に開発の名をかりて自然を破壊して来た人間。その自然否定の態度は、地球の汚染から人類自体の破滅をも招きかねない状況である。これを救うものこそ釈尊の生涯、そして教えという東洋的知恵であると信ずるからである。



釈尊は生涯樹とのかかわりに生き、最後は樹の下で入滅された。その涅槃像に興味あるシーンがある。(写真2)の横臥する釈尊の頭と足の所に立つ沙羅双樹の樹の中

から人物が半身を出し、或は合掌したり泣き悲しんだりする彫刻を多く見かける。これはマトゥウーラ出土の「樹とヤクシーの一体像」(写真3)、即ち表から見ればヤクシーだが、裏面は樹であり蓮華の花であるという彫刻の如く、



2 涅槃図 Freer Gallery of Art 49.9.G

樹を人格化したヤクシー(夜叉)の概念が成立していたことを示している。

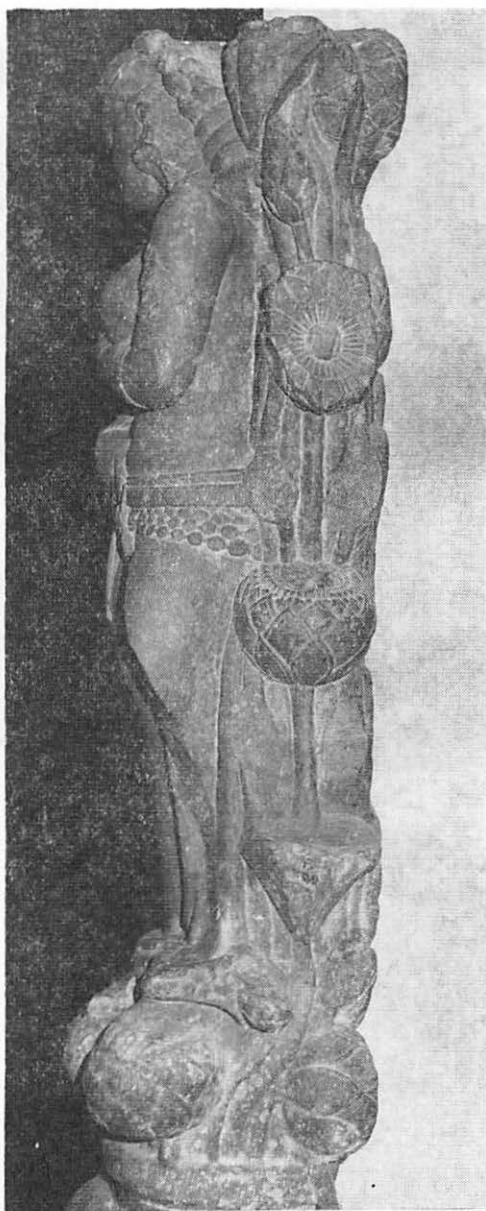
この「樹とヤクシーの一如」という考え方は、やがて「樹と菩薩」、そして「樹と釈尊」の一体化という考え方に至る。従ってこうなると、釈尊のまわりの樹々は、自然の樹ではなく、樹神・ヤクシーが釈尊を守っているということにもなってくる。

更に樹神の概念の成立は、同時にそのような大樹を成長せしめる大地の生命力、即ち地神という概念をよび起す。

かくて樹神は又地神としても考えられる。愛馬カンタカに乗って出家出城される時、城中の人が蹄の音で目覚め、出家を妨げるのを恐れた地神は「馬の足」を捧げもって城外に運んだという話。或は菩提樹下でいよいよ悟られようとする時、マール(悪魔)はこれを

樹と釈尊（高橋）

妨げようと、或はコケテツシュな媚態で、或は恐ろしい形相の軍隊姿で威嚇する。すると、釈尊は指を大地につけて（触地印）地神を呼ぶと、大地震が起ってマールは退散するという話。（写真4）この話の地神はイコール樹神でもある。これを示す彫刻がある。即ち釈尊が悟りに入らんと菩提樹に近づくと、樹神は菩提樹下の金剛宝座の下からア



3 ヤクシー マトウーラ博蔵

ーカンサスの葉につつまれて半身を現わして釈尊を招いている図。（写真5）或はマールの誘惑の図柄に、同じように釈尊の台座の下、アーカンサスの葉の中から地神が上半身を出しているから、（写真6）当時の人々は樹神も地神も同じもの（夜叉）として考えていたことがわかる。



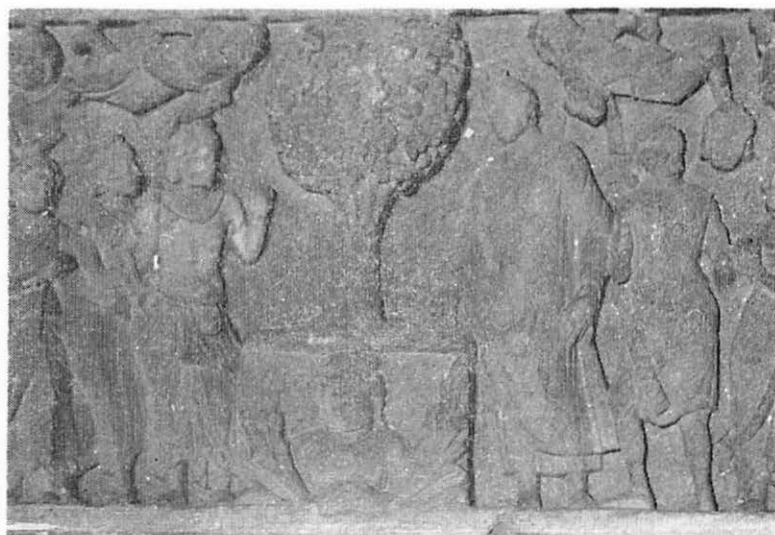
4 降魔 Free Gallery of Art 蔵

こうした樹神（ひいて地神）  
 信仰は、インドの風土、モンス  
 ーンインドから由縁するものと  
 私は思う。然らばインドの風土  
 とは一体どんなものであろう  
 か。



インドは暑い。こうした所で  
 は人々の生活は勢い、巨大な傘  
 のように枝をひろげた大樹の下  
 が生活の場となり、冠婚葬祭の  
 人生の通過儀礼の場でもあつ

た。インドの人にとって樹は切っても切れないものである。即ち、灼熱の太陽がすべてを焼きこがすこの国では、昼は酷暑をさけて樹の下で昼寝し、夜は「貧者の一灯」の話が示すように、ここで集会する。かくてアイスクリーム屋が、日用雑貨を売る者が来る。月に何日ときめて開かれる「市」で、この太い幹を中心に円く店が並んでいるのを見たことがある。勿論農家も大樹のかけに作られ、家畜も樹の下で育てられる。通りの自転車屋もタバコ屋も樹の下。



5 カルカッタ博蔵

かくて大樹の根元には樹の精を祀る小さな祠が出来、供物や花そして紅粉がふりかけられる（ブジャー）。更にそれが発展してヒンズーの祠となり、通りすがりの人が祈って行く。

町角でよく見る光景は、インドの人々は通りすがりに大樹に体をよせ、頭をすりつけて祈っている（写真7）。私ははじめにインドに行った時には、木陰で「トイレしている」と思った程だった。然しそうではなく、真摯に樹の神に祈っているのだった。今さらながら「樹と民衆の生活」の關係の深さに驚くと共に、こうした風土なればこそ、樹とそしてその樹を生む大地の力への信仰（夜叉信仰）が起る筈だとしみじみ思った。

従って、ここで生れ育ち、そして入滅された積尊の生涯も例外ではなかった。その説かれた教説もインドの風土と結びついているのは当然の話である。後に編纂された大乘經典が積尊を超人として数々の奇蹟の過度な表現をしているのと違って、積尊の言行が残されているという原始經典や大般涅槃經の文章が、如何に積尊がインドの自然と、それに順応した



6 Kr sherriev 蔵

風習の中で生涯を過ぎたかを示している。例えばマヤ夫人が樹の下で釈尊を産まれ、誕生後の樹神への宮参り、或は出家した釈尊の山林での苦行、菩提樹下の悟り、以後樹下から樹下への遊行、そして最後は沙羅双樹での入滅等々。いわば釈尊の一生は樹とのかかわりの中であり、且つ又これは釈尊だけの生き方ではなく、当時の、否現在まで一貫した修行者の生き方であった。

即ちこのことは、インドを旅する者のどこにでも見かけることである。或は樹の下に冥想し、或は老体を杖に托してハダシで歩いている修行者。釈尊もかくやと思われ、まさに二千五百年の時間が止ったように感ずるのは私一人ではあるまい。こうした樹や自然とのかかわりを、まず釈尊の言行が残されているといわれる原始経典の中から見て見よう。

樹と釈尊（高橋）



イ、ガヤー

尊き師はガヤー（林）のタンキ  
タ石床におけるステイローマと  
いう神靈（夜叉）の住居におら  
れた。<sup>(8)</sup>

ロ、ラージャガハで積尊の止宿さ  
れた所は

パニヤンの樹木の園、<sup>(3)</sup>シート  
林のサツパソソディカの洞窟、<sup>(4)</sup>  
ターポード園、ヴェーヴァナ

（竹林）のカランダカーニヴァーパ、ジバーカのマングロー林、マハヴァナ（大林）の二階建講堂、<sup>(5)</sup>  
アジャパーラ  
ニグロード樹、<sup>(6)</sup>ムチャリンダ樹、<sup>(7)</sup>ラージャタナ樹、<sup>(8)</sup>ラッティの林園のスパティタ廟にとどまって……カクダ樹に住  
んでいる神が、ここにつかまって下さいと枝をまげた、<sup>(10)</sup>ネーランジャ川のほとり菩提樹の根もと<sup>(11)</sup>

ハ、ヴェーサリー

アンバパーリーのマングロー園、<sup>(12)</sup>チャーパーラ靈樹ウデーナ靈樹、<sup>(13)</sup>ゴータマカ靈樹、サーランダダ靈樹<sup>(14)</sup>



7 町の裏通りで



ニ、ナーランダ

パーヴァトリカ商人のマンゴー林<sup>(15)</sup>

ホ、パーヴァー村

鍛冶工の子チユンダのマンゴー園<sup>(16)</sup>

ヘ、クシナーラ

力士が生れた所のサーラ樹の一对のサーラ樹の間に<sup>(17)</sup>

ト、その他の地及び位置不詳の所

(舎衛城) サーヴァツティ・ジュータ林にいた時<sup>(18)</sup>

○ コーサラ国のスンダリカー河の岸に滞在されて居られたバラモンは火の祀りの御供物のおさがりを与えようとした。遠からぬ所でブツダが或る樹の根もとで頭まで衣をまとって坐っているのを見た<sup>(19)</sup>

○ 特定の夜、即ち半月の十四、十五日及び八日の夜に園林の靈域 (Cetiya) など、怖ろしく身の毛もよだつところに、床や座を設けて止まろう<sup>(20)</sup>

○ 修行者は樹や墓地を愛し<sup>(21)</sup>

○ ある時、道をはなれた密林のところに至り、その中に入って一樹のもとに坐した<sup>(22)</sup>

○ ルンビニー

美しい木立ち茂る (財宝の神クベーラの) 楽園チャトラタのような心愉しい森の奥地ルンビニーと名付ける園に<sup>(23)</sup>

### 樹と釈尊（高橋）

かくの如く釈尊は樹とのかかわりの中で一生を過ぎた。然して、その樹は単なる自然としての樹ではない。熱帯という風土の中で、暑熱から逃れることを通じて、もっと精神的なものへの昇化であった。例えば、夏、我々が目がまわるような思いで、やっと大木の根方にたどりつく。そしてその樹陰の涼風にほっと救われたような気持になる体験をよくもつ。こうした体験が、やがて樹の下に居ること自体大いなるものにつつまれているという「安らぎ」になる。恰も親の足元で幼児が安心して遊んでいるように。これが聖樹信仰の源泉であったと思う。



釈尊と樹とのかかわりは更に続く。菩提樹下で悟った後も、その悟りの内容をたしかめるべく、アジャパーラニグローダの根元に七日間<sup>(24)</sup>、ムチャリンダ樹にも、更にラージャータナ樹にも、そして又もとのアジャパーラニグローダ樹下で夫々七日間その内容をたしかめ、又楽しんだとあるが、

この釈尊をあたたく包み、釈尊に安らぎを与えたのは、最早や樹そのものではなく、チャイトヤ・聖樹聖所であった。ここにも前述の樹神即地神ということが示されていると思う。これを示す最適な経典がある。大般涅槃経のベーサリーの所である。岩松浅夫氏は次のように訳している。（原始仏典ブツダの生涯「大いなる死」第三章2）

「アーナンダよ、このヴェーサリーの町はたのしい所である。このウデーナ霊地は楽しい所である。ゴータマカ霊地は楽しい所である。サツタンバ霊地は楽しい所である。パフブッタ霊地は楽しい所である。サーランダダ霊地は楽しい所である。そしてチャーパーラ霊地は楽しい所である」と訳され、

一方中村元氏は（ゴータマ仏陀の生涯 一九四頁）同じ所を

「アーナンダよ、ヴェーサーリーは楽しい。ウデーナ (Udena) 靈樹は楽しい。ゴータマカ (Gotamaka) 靈樹は楽しい。サタンバカ (Sattambaka) 靈樹は楽しい。バフプッタ (Bahuputta) 靈樹は楽しい。サーランダダ (Sarandada) 靈樹は楽しい。チャーバーラ 靈樹は楽しい」

と訳されている。岩松氏や中村氏が靈地靈樹と訳されている原語は共に *Cetiya* である。同一のものを樹やこれを生み出した大地、靈樹靈地と訳されている所が、両者が同じ意味を兼ねそなえているもの、両者の同一を指し示していると思われる興味深い。これについて中村元氏は、スッタニパータで「建物が建てていたわけではない。樹のまわりが聖なる神域ということである」と解説されているが、<sup>(25)</sup> さぞかしジャーカタ No. 5305, 479 の如く、<sup>(26)</sup> まわりに柵が設けられ、その中は掃き清められていたであろう。そこがチャイトヤとして人々から信仰されていた。従って釈尊が樹から樹に遊行されたのは、こうしたチャイトヤとしての樹から樹であった。そして、ここに坐す時、何ものか大いなるものに、「つつまれた」心の安らぎを感じたのであろう。これが前掲の經典の「○○樹はたのしい」といった表現となつて行つたと私は考える。

この大いなるものに「つつまれる」という感じを示すジャータカがある。即ちムチャリンダ樹に住む竜、これも樹神の一つとして考えられるものだが、略述すると次の如くなる。

「樹下に冥想する釈尊が風雨にさらされるのを防ぐため、釈尊を竜の胴体でぐるぐる巻きにして、<sup>(27)</sup> 釈尊を保護する」(写真 8)

という有名な話である。これは「樹神につつまれる」ということを心理的に適格に表現したものと思う。これは又洞窟中で地神につまれるという感じにもつながる。だからこそ、釈尊はラージギールで竹林精舎が寄贈されているに



8 Victoria and Alleer Musiunr in London

も拘らず、「盗賊の窟、ウーバーラ山の中腹のサツタパンニの窟（七葉窟）インギリ山のカーラ・シラー、シータ林（寒林）のサツパリンディカの洞窟等とまり歩いた。<sup>(28)</sup>これ又自然の洞窟ではなく地神に「つつまれて」の境地であったろう。冒頭の私のコレクションの洞窟中の積尊も、こうした大地即ち地神に「つつまれ、それと一如となった積尊を表わしているものと思う。

積尊の樹神地神とのかわりは

更に更に続く、スッタニパータには

○或る時、尊き師（ブツダ）はアーラヴィー国のアーラヴァカという神靈（夜叉）の住居に住み給うた<sup>(29)</sup>

○或る時、尊き師（ブツダ）はガヤー（村）のタンキタ石床におけるスーチローマという神靈（夜叉）の住居におられた。その時カラという神靈とスチローマという神靈とが師のいます近くを通り過ぎた。<sup>(30)</sup>

○尊き師（ブツダ）はアーラヴィーにおけるアツガーラヴァ靈樹のもとにおられた。その時ヴァンギーサさんの師でニグロータ・カサツバという長老がアツガーラヴァ靈樹のもとで亡くなってから間がなかった。<sup>※31</sup>

○わたしは特定の夜、すなわち、半月の十四・五日及び八の夜に園林の靈域（*Orchard*）森の靈域樹下の靈域など…の文章から見ても積尊と樹の関係の深かったことがわかる。積尊は「自己をよりどころとして、他にこれを求めてはいけない」<sup>※33</sup>の言葉の如く、超越者を求めなかったといわれているが、然し、樹神地神を意識的に「祈る」という立場ではなかったが、常に心情的に、樹や洞穴の中で「安らぎ」の感を得て居られたことは十分推測出来る。

だからこそ、前述のカルカッタ博物館の「樹神が積尊を悟りの座に招き入れる」とか、又「地神が地震を起してマールを退散」せしめ、又「入滅をかなしんで樹神が樹から半身を出して」泣くという彫刻が作られたのである。このように積尊は樹と大地の中で、即ち「自然につつまれて」生涯を送られた。



以上述べた原始経典より成立の遅い（AD一世紀）ブツタチャリタには樹神夜叉の総大将たるクベラと積尊との間柄が美しい文章で数多く述べられている。即ち

○夜叉カピラの名にちなんで呼ばれるこの都（カピラバツ）は、それをとりまく郡・町・村を挙げて悦んだが、そのさまは恰もナラクバール（クベラの子）誕生の際に財宝の主（クベラ）の都（アラカー）の天女が群らがって喜んだ如くであった。<sup>※34</sup>

○かの北方クルの住民たち、さらにまた（財宝の神）クベラの遊園すらも美しくすることが出来る…<sup>※35</sup>

樹と釈尊（高橋）

○財宝の神（クベーラ）の息子に天女の群れが待ること…<sup>※(88)</sup>

○（出家出城に際し）すると夜叉たちはお辞儀して、身体をかめながら、その下腕を金の腕環で飾りあげた蓮花のような手の先を（悦びに）震わせながら、差し出して、その手で駿馬の進化のような（四つの蹄を大地につかぬう）持ち上げた。<sup>(87)</sup>

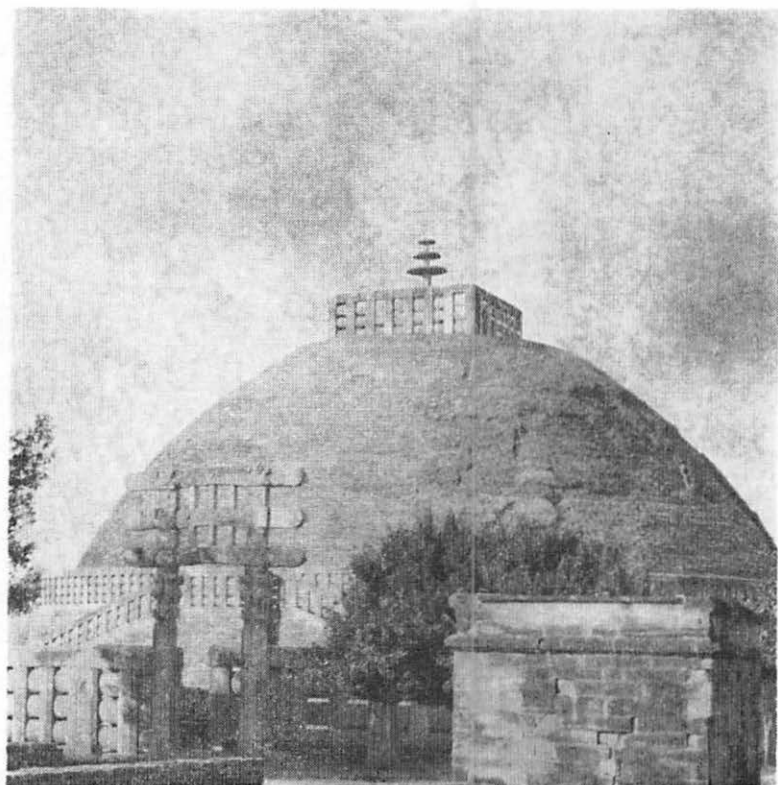
○この彼の言葉をきくと、財宝の主クベーラの眷属たちは悦んだ。また心から悦んだ。神々の群れは彼にその決意をしたことの成就を予言し、祝福した。<sup>(88)</sup>

○天上の（財宝の神）クベーラの地位と地上の王の栄華の両者を同時に享受したらどうだ。<sup>(88)</sup>  
等々枚挙に遑ない。このブツダチャリタは成立も時代的におそく、成立地も北西インドだから、シルクロードの通商が当時は極めて隆昌であったのに対応し、樹神の富の面が強調され、財宝神となったバンチカ・クベーラが人々から渴仰された。現在数多く出土しているバンチカとハーリティー像、フアローとアルドクショー像がこれを示している。こうした当時の状勢を反映してブツダチャリタには金銀財宝の神としての夜叉の王が釈尊とかかわっていること  
の表現となっている。然しその源は樹神と釈尊とのかかわり、即ちモンズーンインドの風土の中での間柄であることは勿論であろう。



然して樹神につつまれてという立場が、更に樹神即釈尊というところまで徹底して行く。

冒頭の「洞窟内の釈尊」の肩から火が出、足もとから水の出る図柄はこうした「超越者」「救済者」としての釈尊



9 サンチー第一塔

という立場に移行したものである。これもインドの風土から来る人間と樹との親密かかわり合いからの必然的な帰結である。

即ちカルカッタ博物館のベースナガル出土の如意樹が枝から財布や穀物の壺が垂れているが、こうした聖樹をかこむ柵たる欄楯が、そのまま積尊の舍利を祀るストゥーパの頂部に作られ、又、聖樹の像の上にかけてられた傘蓋が仏塔の最頂部に建てられるようになる。（写真9）これは聖樹に対して行われたブジャー（供養）が、そのままストゥーパに捧げられるようになったものだし、燃灯・焼香・散華・奏楽・右繞の儀式も、もともとは聖樹にやどる樹神・

樹と積尊（高橋）

夜叉、更にこの聖樹を育てる地神に捧げるものであった。これはジャータカの数々の物語が示している。

これらの儀式が仏塔に対して行われるようになったということは「聖樹イコール積尊」という図式がますます顕著になって行ったことを示している。



10 舍利容器・個人蔵（日本）

即ち、ベシヤワル博物

館蔵のアーカンサスの葉の中から積尊が誕生するような彫刻が出るに至る。これは南伝の因縁物語にセーナ村の長者の娘<sup>(40)</sup>スジャータが樹神と間違えて積尊を供養したとあるが彼女が樹神と積尊を区別出来なかったことを意味し、当時、最早や兩者を同じように考えていたことを示している。

こうした考え方の典型



の生命力の発現として超越者になる。

法華経でいう「久遠の本仏」ということとなる。かく立場の飛躍をこの像は示している。

こうした例はオーランガバード石窟第九窟二階ベランダ近くに、仏が恰も木の実の如く描がかれ、アジャンタ石窟第七窟に宇宙の心捧から無数の茎、その夫々の茎上の蓮華台上に諸仏が坐っている。(写真12) こうした例は北魏の

樹と釈尊(高橋)



11 ラホール博物館蔵

的もなのは、アーカサンスの葉の株の上に舍利塔が立ち、恰も仏舍利は樹の実のようにも見える。

(写真10) 或は又ミラクル・オブ・スラバステイといわれる、ガンダー彫刻の白眉といわれるものに、釈尊は水中(水の下の大地)から出た太い柱で支えられた蓮華

台の上に坐し、(写真11) その柱から分れた多くの茎の上の蓮華台の上に諸仏世尊が坐すような彫刻が出て来る。こうなると、釈尊自体は人間ではなく、大地・大自然



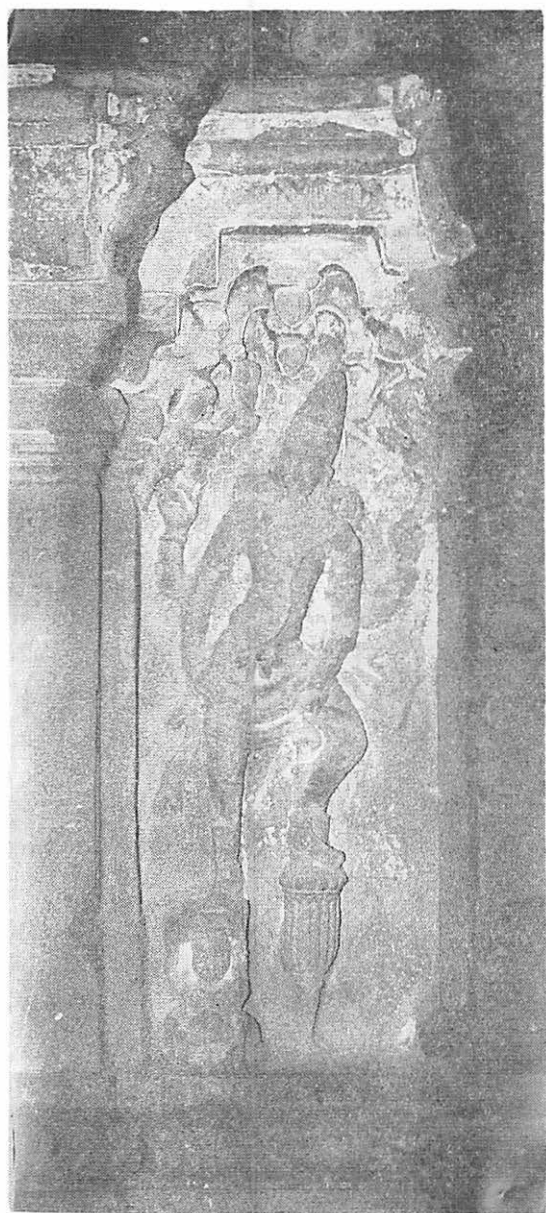
12 アジャンター第七窟内前室側壁

石窟内彫刻や、チベットの聖樹マンダラ等枚挙に遑まない。その中で有名な敦煌莫高窟第三三二、東壁の阿彌陀浄土變（七世紀）は前述のアジャンタの彫刻とそっくりで、これが後世のマンダラを思わせる多仏の造像形式となつて行く。

こうした仏と聖樹との関連は仏教の独断場のみではない。ヒンズー教でも同じである。岩山をすっぽり彫り進み、大地の臍の如く彫り残されたエローラ石窟カイラーサ寺。この前に立つと、大地の生命力が地の底

から湧き出したように感ぜられる。この巨大な岩のかたまりたる神殿の、然も中心塔最上階のまわりに無数のヤクシナが彫られている。

それらの中に、「一つの手で樹の枝をもち、足は片方を地神が捧げもち、他の足は蓮華の蕾の上ののっている」像（写真13）がある。これらはパールフットの模写といつてしまえばそれまでだが、岩をすっぽりくり抜いた神殿頂上



13 エローラ石窟 カイラーサ寺院 頂部側壁

の壁に立っていることが、大地の生命力の表現そのものとして考えられる。

こう考えると、仏陀もヒンズーの神々も樹神や大地の神と一如のものであり、仏教もヒンズー教も共にインドの風土の中で生れ、仏も神も「自然の源」からよって来ていることを如実に示している。仏陀が人間釈尊から救済者超越者になって行く大乘仏教の仏陀観の素地はこうした樹神信仰、否インドの風土自身にあったといえよう。

そして又他面から見ると、この自然の樹も、単なる樹ではなくて、大自然の生命力、人間や動物そして樹々をも育

樹と釈尊（高橋）

樹と釈尊（高橋）

ぐくみ育てる「大いなるもの」の表現であるから、樹自体も仏陀と同じ素地をもっているものとなる。だから、いたずらに樹を切つて自然破壊することは、この偉大なるものを切ることになるのである。



然して樹下から樹下に遊行した釈尊の生き方は、やがて僧達が一定の所属僧院に定住することによって、大いなる変化をもたらしした。

これは釈尊滅後百五十年、アショカ王時代に編纂されたといわれる長老偈や長老尼偈を大般涅槃經と対比してみればわかる。即ち

○そなたは風病に犯されながら、叢林や林の粗末な、そしてすべてに事欠く地域に住む<sup>(41)</sup>

○緑の光を放ち、よく繁茂するアツサツタ樹（菩提樹）の下で……<sup>(42)</sup>

○さあ私は独りでブツダが称讃されている森へ行こう。そこは孤独に住し、専念する修行者にとって安楽の場所である<sup>(43)</sup>

と一定の所属寺院への定住化が進んでも、心ある僧は依然として、樹や洞窟を求めて屋外に住もうとしたことがわかる。然し事態は益々変つて行く。それを表現した経文は、

○利益を欲し、怠惰に流れ、精励することなく、林の樹蔭を嫌う輩は、村落のほとりに住むであらう<sup>(44)</sup>（傍線筆者）

○あらゆる煩惱のけがれを滅尽した長老たちは今や死んでしまった、そのような人は数少ない<sup>(45)</sup>  
というような状況になり

○頭を剃り重衣をまどつていながら、修行に専念しないような人々は、名聞利養にうつつをぬかし、ただ名声を欲しが<sup>(46)</sup>る。(傍線筆者)

というような僧が多くなり、本来の森を捨て町に住む僧達は内は世俗の欲にみちながら、外見だけは僧らしく振舞うような者が多くなる。(傍線筆者)即ち

○輕薄で、心の定まらない修行者が、たといボロ布でつづつた衣を着ていても、猿が獅子の毛皮をまどつていよう<sup>(47)</sup>に、その為彼は美しくは見えない。

○在家者たちが捧げる洗面粉油、洗い粉、水、座具そして食物をより多く得ようと欲求する<sup>(48)</sup>。とあって、我々も耳がいたい程、俗化して行ったことがわかる。これが釈尊よりたった百五十年しか経ない時の表現であるから驚く。

かくして自然をはなれた僧は、ますます世俗の欲にとらわれた生活に陥って行く。



然して、自然をはなれた人間は一体どこへ行くのであろうか。西洋的自然観の如く、自然と人間を分け、自然に対する人間の優位をうそぶき、「人間は自然を支配するもの、自然は人間に奉仕するもの」等の不遵の考えに陥って行く。従つて、人間の快適な生活だけを求めての自然の開発、否自然の破壊が進んで行く。これは人間自体の破壊にも連らなる。現代の地球温暖化・酸性雨オゾン層の破壊がそのほんの一つの表現である。

自然と人間もともと一枚のもの、否、人間は自然の中に生かされている、ほんの小さな存在にすぎない。こうし

樹と釈尊（高橋）

た謙虚な反省がなければ人類に救いはない。今こそ釈尊の生涯、そして釈尊を生んだインドの自然観に立ちもどらねばならない。

冒頭の写真「洞窟内説法の釈尊」像は釈尊が「自然に生かされ」又「自然の生命の凝結」として超越者釈尊にまで考えられていることは前述した。然し、これは釈尊だけではなく、我々も動物や樹と共に、自然の中に生かされ、その生命力を分与されたものである。これが「すべてのものは仏性をもつ」ということであり、動物だって樹だって成仏する、即ち「草木成仏」という思想が出て来る由縁のものである。

この同じ立場のものが、他を傷つけ、切ったり殺したりしていいわけではない。その報いは必ず自らにふりかかって来る。

私はこうした立場から釈尊の生涯、そしてそれを表わした仏教彫刻の意味を強調したい。

各地で「○○樹はたのしい」といわれた釈尊の「自然と一如」となる生き方、これこそ現代の人類否地球の危機を救うものである。こうした釈尊の、否釈尊を生んだインドの大地、そこから来る東洋的自然観に、今こそ立ち帰らねばならない。

〔註〕

(1) 大方広莊嚴經の如き大乘の仏伝

(2) 中村元訳ブタのことば（岩波文庫）五九頁

(3) ブツダ最後の旅（中村元氏）3—42

(4) 岩松浅夫訳 ブツダの生涯（原始仏典）3—42

(5) 同 右

3—48

- (6) 岩松浅夫訳 原始仏典 仏陀の生涯内 畝部俊英訳 律蔵大品 2 | 1
- (7) 同 右 3 | 1
- (8) 同 右 4 | 1
- (9) 同 右 1 | 24の22 | 2
- (10) 同 右 1 | 24の20 | 2
- (11) 同 右 1 | 24の1 | 1
- (12) 中村元氏 仏陀最後の旅 2 | 21
- (13) 同 右 3 | 1
- (14) 同 右 3 | 2
- (15) 同 右 1 | 15
- (16) 同 右 4 | 14
- (17) 同 右 5 | 1
- (18) M.N.I. (原始仏典 一六五頁所掲)
- (19) 岩波文庫 ブツダの言葉—スッタニパーター 九三頁
- (20) M.N.I. 原始仏典 一六六一—一六七頁
- (21) S.N. 原始仏典内 九五八—一六〇
- (22) Vinaya Mahānāga (p.33)
- (23) 大乘仏典 ブッタチャリタ 1—6
- (24) 原始経典 律蔵 畝部俊英訳 律大品 1 | 24の2 | 1
- (25) 中村元 ブツダ最後の旅 (岩波文庫 (註) 一九三一—一九五頁
- (26) ジャータカ №三〇五・四七九 (南伝大蔵経参照)
- (27) ジャータカ 律大品 M.V.I.S.3, 五分律大22—1〇三中
- (28) 前掲岩松氏 大いなる死 第三章四二
- (29) 中村元氏 岩波文庫 四三頁

樹と釈尊 (高橋)

樹と釈尊（高橋）

- (30) 中村元氏 岩波文庫 五九頁
- (31) 同右 七二頁（釈尊だけでなく当時の遊行者はこうして樹の下で死んだ）
- (32) 原始仏典 一九頁・M.N.I. 166-7
- (33) 相應部經典 四七・九、「病」（九一）
- (34) 大乘仏典内 原実訳 プッタチャリタ 1 | 89
- (35) 同右 3 | 10
- (36) 同右 1 | 89
- (37) 同右 5 | 81
- (38) 同右 5 | 85
- (39) 同右 9 | 21
- (40) 南伝大蔵経 二十八卷 因縁物語 一四七頁
- (41) 岩波文庫 中村元氏訳 仏弟子の告白—テラガター— 三五〇—三五五
- (42) 同右 二一七
- (43) 同右 五三八
- (44) 同右 九六二
- (45) 同右 九二八
- (46) 同右 九四五
- (47) 同右 一〇八一
- (48) 同右 九三七
- その他参考文献として

栗田功編 Gandhara Art I, II.  
Ingolt Gandhara art in Pakistan